

この寺を淨土教の聖域たらしめ、春秋二季の彼岸に於ける日想觀の流行と、扇面寫經の如き淨土教藝術品を遺さしめるに至つた經路を明にしてゐる。

後者は、石山本願寺創立以前に於ける大阪の交通路を明にしようとしたもので、熊野街道に關する考證と高津宮南門大道に關する考證との二部より成り、仁徳天皇の難波高津宮南門大道が聖武天皇の難波京の京中大路となり更に中世熊野街道として踏襲されたことを論じてゐる。而してその根據とするところ文獻や古地圖の記載にあることもとよりであるが更に著者の實地踏査の結果に俣つところ甚だ多く、熊野街道に於ける一里塚の配置状態と里制の問題の如き興味ある新事實に就て教へられる所少くない。(大阪湯川弘文社發行、各冊六十錢)(柴田)

○京都帝國大學 考古圖錄 續編  
文學部陳列館

昭和十年五月發行

會て本陳列館考古圖錄正編が世に送られて以來十數年を経過する間、今や圖錄初刊時の二千二百餘點は新收品を増加して總計三千八百點に上つた。本書はこの我國を

初め、支那、歐洲の遺物の新收品の主要なるもの、みも以て圖版六〇に編まれたものである。吾々は近き將來に於て、本書につゞく續々編の出版を待望する。(京都帝國大學文學部、非賣品)

○本山考古室要錄

末永 雅雄編

昭和十年二月發行

故本山松陰翁の集藏にかゝる本山考古室の目録として兼て又同翁の思出草として出版せられた本書は、嘗て出版せられた圖錄と解説を以て後半がなされ、前半は藏品の目録に用ひられて居り、各頁上段の空白を同頁の中の目録品名中目立つた遺物の圖示に費され、それはこの種の目録として最初の試である。本書の特徴は即ちこゝに存してゐる。

我々はこの書の如き親切な目録の出版の多く世に出づる事を願ふものである。(本山家藏版、非賣品)(以上中村)

○人文地理學通論

石橋 五郎 閱  
別技 篤彦 著

一般に通論的著作は多年學問の研究に従事した老大家

にして始めて良くする事を得るが、未だ而立にも達せざる畏友別技學士著はす處の本書は人文地理の諸部門を殆んど網羅し、記述は平易明快にして然も最近の趨向を傳へて遺憾なく、通論として隨一の名著と云はれ得べきは眞に驚異に値し敬服の他はない。本書が斯くも完璧に近づき得た原因の半は、蓋、本書の據る處石橋教授の本學に於ける普通講義特殊講義にあつて、それ等を祖述し發展せしめられ更に同博士の校閲を経られた事に歸せらるべきも、著者の優秀なる編纂の能力なくしては到底これほどの成功を收め得なかつたであらう。

章を分つ事九、第一章は人文地理學の發達を概觀し、第二章に自然の影響と人間の影響とを總括的に取扱ひ、所謂地人相關の眞意を釋明し、第三章は人種、民族地理で人類の發源地、人種、民族的特徴と地理的關係、世界に於ける人種民族の分布、人類の氣候適應を述べ、第四章人口地理では人口の分布、密度、増減、移民問題等に觸れ、第五章聚落地理では聚落の種類、發生、盛衰、形態を論じ、第六章食料及び原料生産の地理學的考察は農、

林、牧、水産、鑛業等の所謂生産地理で自然的關係と人文的關係の兩面より論述されて居る。第七章は工業地理、第八章は交通地理で陸路、鐵道、内陸水路、海路、航空路に互つて居り、第九章の政治地理は國家の形成、存立と自然的、人文的關係、國家の發展と自然的人文的關係が考察されて居る。各章の内容に關しては既に岡田博士の地理學評論に於ける、藤田學士の地球誌上に於ける批評があるから、それ等に譲り、たゞ紹介者の蜀望の意を表明すれば、第三章と第四章の中間に歴史地理の一章を設けられ、人類歴史の展開と地理的關係を概括されたならば尠くとも歴史家にとつては頗る有益の著書となつた事と思はれる。この方面に關する外國地理學者の勞作も可成りある様であるから、この項目を設けられる事は通論の體裁を整へる爲にも必要ではないかと思ふ。尤も著者は地理學を通論と特論に分ち、特論には各地の地誌を述べると云ふ事であるから、歴史地理はこの特論の序論とも云ふべき部分に編入する爲故に除かれたものであるかもしれない。

とまれ本書は地理學通論として、中學の地理教授者にとつては良參考書であり、高等専門學校の教科書として又文檢受驗者、一般に人文地理學の現狀を知らんと欲する人に第一に推薦せらるべき良書である。(菊版三百八十頁、定價三圓三十錢、地人書館發行)(米倉)

○佛蘭西革命前後 中村善太郎著

凡そ一國に於ける歴史現象の考察には何よりも先づ同國の詳細なる歴史事象の探究々明が前提とされなければならぬ。然し若し歴史研究者にして其研究對象を單に當該一國の其のみに終始局限するならば、恐らくや其處には唯該博なる史的智識と史實の羅列のみが残され、同歴史の有する意義、特質等の認識は不可能であらうし、假令其が若干可能であるとしても飽迄其は他を知らざる獨斷的自己認識、自己解釋に留るであらう。偏見固陋にして、吾々歴史研究者に最も要請さる可き解釋、意義の伴はざる非科學的歴史觀は多く是に歸因する處と思はれる。斯くて若し歴史研究者にして正しく科學的たらんとするならば、常に個々の歴史事實の探究に依て史的智識を

豊富にすべきは素より、と同時に世界史に對する絶えざる關心と比較研究に依る歴史の意義の認識を怠つてはならない。

一七八九年勃發した佛蘭西大革命は所謂ブルジョア革命中最も典型的なるものと謂はる。然し吾々は此より早く既に世界史上、絶對王政治下にあつて諸種の近代的改革の行はれたる事、イギリスに於ける清教徒革命を絶頂とする著しく宗教的色彩を帯びたる諸ブルジョア革命の遂行せられたる事、將又英本國に自由を要望して起つた北米合衆國の獨立、其他等々何れも「近代的」「ブルジョアの」の名を冠すべき諸改革、諸變革の行はれたるを知つてゐる。而も何故に吾々は特にかの佛蘭西大革命を最も典型的なるブルジョア革命と言ふのであらうか。

斯く云ひ、斯く佛蘭西革命に其意義、其特殊性を認知し得る爲には、よし如何に其が心行く許り詳細を極めやうとも、佛蘭西革命の研究没頭のみに依ては決して充分ではない。其爲には常に世界史上「ブルジョアの」「近代的」「改革、變革と稱せらる、諸歴史事象への絶えざる關